

## シベリア抑留の思い出

長野県 竹内 弥一

大正九（一九二〇）年六月、長野県上伊那郡手良村に生まれる。

昭和十三（一九三八）年、上伊那農業学校第二部三年卒業。

昭和十三年四月、赤穂竜水社蚕種部に入社。

昭和十五年、満州関東軍に入隊。

昭和十八年三月、満州関東軍満期除隊。

昭和十八年四月、満州国乾安県公署勤務。

昭和二十年八月一日、臨時召集により新京（長春）

防衛司令部挺進隊に入隊。

昭和二十年八月、終戦により新京第四大学に集結する、兵器を公主嶺に納めに行き、第四大学に帰ると同時に新京地区よりの召集者は召集除隊となる。勤務地乾安県公署の官舎に帰る、既に官舎は無人となつてい

る。再度第四大学に行く。

九月に入って千五百人の作業大隊が編成される。九月七日に第四大学を出て駅もない所で待っていた貨車に乗せられる。

列車はやがて黒河に着く、ここで黒竜江に停泊している大きな船に、満州各地から列車で運ばれて来る物資を貨車から降ろし、船に積み込む作業を一週間続ける。船に満載し終えると、今度はブラゴエシチェンスクに渡る。ここで船から荷降ろし作業を一週間がかりで終える。

作業が終わるとまた貨車に乗せられ何日走ったか、着いた所はエニセイ河のほとり、ここで船に乗り換えてエニセイ河を遡ること五日。更に歩いて五日、着いた所は山の馬小屋だった。この間食糧の配給は少なく、体力は消耗し何人かの死者が出る。

この馬小屋を改造し板で二段に仕切つてある、これが収容所である。便所はなく、大便は風除けを造り、小便は旗を立て、印をしただけの所で用を足す。まこと粗末な収容所であった。

作業は木材の伐採作業であった。朝五時頃起床、点呼、名ばかりの朝食を済ませると現場に行き、ヨキとピラを受け取り、山に入り作業にかかる。

冬のシベリアは厳しい寒さの上、昼が短く三時を過ぎる頃には暗くなる。昼食はスープが出るだけ、空腹と疲労で、仕事は捗らない。一日のノルマは二人で一・一メートルに切った木を二メートルの長さ、一メートルの高さに積まなければならない。

ある夜、分隊長の私が呼び出され、ノルマを達成していない者がいる、明日から達成出来ない者は営倉に入れると言われる。営倉は食事もなく、火の気のない所に入れておく。死ぬのは必定、何とかしなければと考えた末、検査の済んだのを積み替えてその場を通す。

しかし過労と栄養失調で倒れる者が後を断たず、その数七百人に達する。

やがて遅いシベリアの春が来てエニセイ川の水量が増した五月、大きな船が来て、部隊全員この船に乗り、川を下りクラスノヤルスクに着く。半数近くに

なった部隊は再編され、階級章は全員外され、班長は選挙によって選ばれた。収容所は山より良かった、作業は住宅等の建築、石炭の貨車下ろし等で、石炭下ろしは十五トン車を二人で下ろす。

またこの頃からアクチーブと呼ばれる連中による民主教育が始まる。時々配られる『日本新聞』を教本に行われる。気は進まぬが日本へ帰るためとやむを得ず、進んでやる振りをしてその場を繕う。

体調を崩していた私は隊長室に呼ばれ「病弱者五十人程を日本まで無事連れて帰れ」と言われ、共に列車にてナホトカへ、更に船に乗り舞鶴に上陸し、久しぶりの我が家に辿り着いたのは昭和二十二年八月二十四日のことだった。

しばらく体調を整えて就職先を探したが、役場、農協、その他どこへ行ってもシベリア帰りは共産党と言って断られた。三年が経過し養蚕の技術が認められ、竜水社に採用となり、各農協管内の養蚕農家の指導に当たる。